

平野郷を歩こう

環濠自治都市の史跡を訪ねて

5月22日(土) 10時～16時

講師：郷土史家 **村田隆志氏**

解説文：村田隆志氏

平野郷

平野郷とは、昔の摂津国の平野と喜連、そして河内国の加美、瓜破、長吉の5つの地区でできた平野区の一部です。昔の平野郷はこの平野本郷と、現在東住吉区になっています。今林、杭全、今川、中野の各村を含んだ地区でした。平野周辺を見ますと、百済や鞍作、喜連など渡来人と関係の深い土地柄で、この平野も、朝鮮にあった新羅の女神を祭る赤留比売神社や、平野郷の最初の持ち主、坂上も百済系です。平野の地名はこの土地を貫った坂上田村麿の息子、広野の名がなまったものと云われています。この土地は、この平野麿の子孫と、そこから分家していった七名家と呼ばれる一族と協力して開発しました。そして、町の運営は、その七名家を中心に、荘民の中から選ばれた人々の合議によって運営されてきました。この自治的な運営が、戦国時代に郷の周囲を土居と濠で囲み、防衛する自治都市が造られ、堺と共に名を馳せました。その後、平野郷は信長、秀吉時代から徳川の江戸時代17世紀の終わり頃まで直轄領となり、そのあと元禄7年〔1694年〕に柳沢吉保に与えられ、始めてこの地が大名領となり、以後古河藩（下総国）に付いた所領として明治まで続きました。秀吉が大坂に築城し、町造りを始めた時、富裕な平野の商人を移住させ、また道頓堀や末吉橋など、平野の人が大坂の町造りに係わっています。江戸時代は商業の中心が次第に大坂に移っていき、堺など近郊の町はどこも衰退していくのですが、平野郷は旧大和川の綿作の発展、特に操り綿の集散地として繁栄しました。いま宝暦13年(1762年)の絵図に見られる濠は、今殆ど埋められて見る事が出来ませんが、大坂夏の陣後、すぐに家康の命令で代官であった、地元末吉孫左衛門吉安によって完成した町割りも、今も健在で、今次大戦の戦火にもあわず、由緒ある寺社や町角の地藏堂など、古い情緒が残っていて、今日もその雰囲気味わって頂ければ嬉しく思います。

大念仏寺

大源山諸仏護念陰といい、融通念仏宗の総本山で、俗に**亀鉦**寺といいいます。本尊は十一尊天得如来の曼荼羅画像で、大治2年(1127年)に鳥羽上皇の勅願で、良忍上人(聖応大師)が創建し、その後衰退していた寺を7世法明上人が、鎌倉時代の元和6年(1620年)に本山として定堂化、43世葬空上人が寛文7年(1667年)に本格的な本堂を再建し、本山としての体裁を整え、元禄年間〔1688～1704年〕に46世の大通上人が、融通念仏寺の教義と体制を確立して、現在のような本山としての組織を完成させました。明治31年、失火によって本堂などを焼失し、現本堂は昭和13年に復興したもので、府下最大の木造建築です。文化財としては、融通念仏縁起、**亀鉦**、**幽霊の片袖**と、その縁起など多数の寺宝があり、お練りの期間中公開されています。南門は旧古河藩陣屋の門を移築したもの。毎年5月1日から5日にかけて行われる万部練り供養は、平安末期頃から盛んになった来迎思想によったものでm阿弥陀經に説かれている、極楽浄土のありさまを描き出して、その有り様を善男善女に見せ知らせる儀式で、橋掛かりを25菩薩が行進し、来迎の実演をします。そして、最後に本尊「十一

尊天得如来」の画像を奉持した僧が本堂に入ると、阿弥陀經の誦經が始まり、その場が極楽浄土の姿を表現するわけです。

亀鉦(かめがね)

亀鉦というのは、今も大事な宝物として、大念仏寺に伝えられている鉦のことやが、この鉦が亀鉦といわれるようになったのには、こんないわれがあるのや。

平安時代のこと。大念仏寺を開かれた良忍上人は、大念仏を勧めに諸国を歩いておられたのやが、ことに鳥羽上皇はこの良忍上人に帰依され、自分が日頃うつしておられた鏡をいかえて、鉦として渡された。だから最初は、この鉦を鏡鉦と呼んでいたのや。ところが、南北朝時代に出られた第7世の法明上人という方の時に、亀鉦と呼ばれるようになったのや。

ある日、法明上人は、播州加古の教信寺というお寺にお参りするため、難波浦から船に乗って行かれた。鳴保崎のところへさしかかった時、嵐が来て船はものすごく揺れはじめた。その時、乗っていたお客さんは、これはきつと、竜神のたたりには違いない。だから、御坊が持つておられる鉦を海に沈めて、竜神の怒りを鎮めて下さいと頼んだのや。法明上人としては、大事な鉦を海に沈めてしまうというのは、難儀なことやったのやが、人の命には代えられへんで、この鉦を海へ投げられた。そうすると一転、嵐はぱっと止んでしまい、皆は助かったのや。

教信寺からの帰りも、上人は船で帰ってこられたのやが、ちょうどまた、鳴保崎のところへさしかかかって、この辺で嵐に逢うたなあと上人が感慨にふけておられると、向こうから、大きな亀が頭にあの鉦をつけて、法明上人のところへ返しにきた、いうのや。上人は喜んでその鉦をお受取りになり、亀にお念仏を十篇授けられると、亀は海中深く沈んでいったということや。それからこの鉦を、亀鉦と呼ぶようになったそうや。今でも平野に、亀のまんじゅうというのがあって、名物になってるけど、それはこの亀鉦の話からきてるんやでー。

吉村樟英氏による 《ひらののおもろいはなしより》

幽霊の片袖

元和3年6月3日というから今から三百七十年ほども昔のこと、奥州(今の東北地方)の巡礼が、箱根権現をお参りしてはった時に一人の幽霊が現れたのや。この幽霊は「私は、今日死んでしまったものですが、摂津の国住吉の住人、松太夫の妻でございます。」と名乗り、巡礼に向かって「実は私は、箱根の山の地獄に落ちて苦しんでおります。この苦しみから救うために、平野の大念仏寺へ行って御回向をしてもらいたいのです。どうか、このことを家の者に伝えてください」と、こう頼んだのや。さらに、もし何も証拠がなかったら、家の者は信じないでしょうから、これを証拠に持って行って下さいというて、ふところから、自分の着ていた着物の片袖と香合(香箱)を出して、巡礼にこぼつけた。巡礼は、はるばる熊野から高野山をお参りしたのち、この住吉へやってきて、松太夫さんの家へ行きはった。ところが、たまたま、その日は七月七日で、亡くなった妻の法要を、家で勤めてるところやったのや。巡礼から話を聞いた松太夫さんは最初、そんな話は信じられへんと言うたのやが、証拠の片袖と香合を見せられると、これはまぎれもなく妻のものや。そこで急いで大念仏寺へやって来て、時の道の上人という人の、御回向によって、無事幽霊は成仏できたということや。その時の片袖と香合は、大念仏寺に納めて置かれて、今も残っているのや。年に一回、万部まつりの時にみせてくれるそうやから、一ぺん見に行ってみ。

吉村樟英氏による 《ひらののおもろいはなしより》

今井家

今井家は平野郷の西地区に残る農家形式の町屋で、150年ほど前に建てられた当時の典型的な住宅です。このような萱葺屋根の家は郷内に6軒存在しています。内部は田の字形で左2間が土間、右にミセノマ、ブツマが前後に2間並んでいます。うしろの中庭、離れは後に増築されたものです。

長宝寺

王舎山長生院といい、真言宗金剛峯派で本尊は十一面観音です。桓武天皇の妃であった坂上田村麿の娘春子が、帝の崩御後、兄の広野麿を頼って平野に来て落飾し、慈心大姉と号して開創した寺です。

以後坂上氏の氏寺として、代々坂上家の女子が住職を勤め、女子がない場合は京の公家より入寺しました。そして境内の北西に坂上氏の住居がありました。

寺宝に釈迦の入滅を描いた、絹本著色仏涅槃図や、建久3年(1192年)名の銅鐘などがあり、共に鎌倉時代の代表作で、重文の指定を受けていて、ほかに長宝寺縁起、よみがえりの草紙、逆修講縁起などがあります。

平野の田村はん(坂上氏)

昔の平野の人は、ひじょうに約束を守らん人のことを、「あいつ、田村はんや。」と言うたもんや。

もともと、「平野」という名は、大昔に平野の地を治めておられた坂上広野麿の「広野」がなまったと言われているのやが、そのの広野麿の父君で、蝦夷征伐で知られる坂上田村麿の名をとって、平野の人は、代々、坂上氏のことを「田村はん」と呼ぶようになったのや。

では、なんで田村はんが約束守らん人になるのか。こんな話が伝わっているんやで。昔から、住吉さんの祭には、田村さんが行かんと、祭りが出来なんだのや。ところがこの田村さん、バクチが好きで、好きで、祭りになっても朝からバクチをしては、負けてばかり。

住吉神社の神主さんが使いを出して、どうぞ田村さまのお出ましをと頼んでも、田村はんは、すぐ行くと云うたきり、なかなかやって来ない。そこで使いがまた走る。行こうと思っているが、着物をバクチで取られたので行けんとの返事がある。あわてて神宮が、田村さんの衣裳を整えて御迎えに出るといふ始末や。

田村さんが住吉さん差し廻しの馬に乗って大和川の堤を行かれると、住吉さんのみこしは、田村さんの到着を待ってウロウロしている。やっと田村はんの姿を見届けると、さあ行けとばかりに、みこしが塚の方へ渡って行くのや。その後は毎年、住吉さんの方で衣裳を持参して、田村はんを迎えに来られるようになったそうや。

今でも住吉さんのみこしが、大和川で行ったり来たりするんは、田村はんをまだか、まだかと待つ姿やという。そんなことから、田村はんという言葉が、約束守らん人の意味に使われるようになったのや。

(立田一雄による)《ひらののおモロイはなしより》

あの世へ行った尼さん(よみがえりの草紙)

平野の長宝寺になあ、地獄でえんまさんに会ってきた尼さんの話があるやで。

室町時代の永享十一年のころや、慶心という尼さんが急になくなったんやが、まもなく息をふき返したんや。みんながびっくりして尼さんの額を見るとなんやら判が押してある。

聞くと「えんまさんの王宮まで行って、地獄の様子を見学してきた。この世で善いことをたくさんしておかないと、永久に八大地獄の苦しみを受けねばならん。お前は

ここで見たままのことを世の人に伝えよ。ここへ来た証拠にと、大王さまが御判を押されました」と答えたんや。ところが古い時代なのに誰も信用しよらん。

そうしているうちに、三年目にまた慶心さんの息がとまってしもた。それと同時に熊野権現の神主、田村さんが妙なことを口ばしたんや。「わしはえんま大王じゃ、折角慶心をあの世まで呼んだのにうそだという者が多い。だからもう一度呼び戻したから、よみがえったら注意せよ」とな。しばらくして生き返った慶心さん、手を開くと青い光を放つ舍利と、手のひらには、えんまの御判が押してあったのや。この御判をもとに版木をつくり、みんなとの縁を深めよとおおせられたというた。

あくる年、十日間かかってお経を読んでいると、八日目に見知らぬ坊さんがやってきて、「この寺にはえんまさんのお像がない、私が造ってあげる」というて、たった一日で刻み、これがまつられている長宝寺のえんまさんや。この話、長宝寺のよみがえり草紙というのに書かれているんやが、毎年五月の十八日の御開帳に、このえんまさんを拜んでデボチンに御判を頂いたら極楽へ行くのんまちがいなしや、ぼんも行きなはれ。

《ひらののおモロイはなしより》

全興寺

野中山全興寺は真言宗の寺で、本尊は薬師如来、俗に蛸薬師と称します。

聖徳太子が建てた御堂を中心に、平野の町が造られたと伝えられ、野堂という町名の起源ともなりました。薬師仏は牛頭天王の本地仏であるとされ、杭全神社の奥の院として、夏祭にはここに渡御します。

大坂冬の陣には徳川家康、秀忠の陣立所となり、夏の陣の際、家康を倒すため仕掛けた爆薬で、吹き飛んできた樋尻口地蔵の首と伝える「家康身代わりの首地蔵尊」がまつられています。

◎駄菓子屋さん博物館

この全興寺は「平野の町づくりを考える会」の拠点で、ミニ博物館や「モダンで平野」、大念仏寺でのサマーコンサート、杭全神社くすのき市などのイベント、史跡めぐりや含翠堂講座などを行っています。

◎月と仏のコンサート

中秋の十五夜には秘仏の御開帳と、月見のコンサートが開かれます。(無料)

首地蔵

元和元年(1615年)5月7日、大坂夏の陣の時のこと。八尾若江の戦、道明寺の戦で敗れた豊臣方が、平野に火を放って大坂へと退却する際に、真田幸村は、きっと徳川家康が自分らの後を追って、大和道(奈良街道)から樋尻口に来るにちがいないと考えた。そこで幸村は、潜かに地雷を埋め、かまどの火を焚けば爆発するように、仕掛けておいたのや。

その後、予想通り家康は樋尻口にやってきて、地蔵堂のかまどを焚いたのや。その火は数時間で次第にお堂の下にまわり、まさに地雷に火がつこうとしていた時、家康はふと、小便をもよおして外へ出てしもた。その途端、ドッカーンと大音響をあげて地雷が爆発、地蔵堂は吹っ飛んだ。しかし家康はちょうど外へ出てたので、傷を受けただけで命拾いしたのや。この時幸村の兵がどっとときの声をあげたため、家康軍は散々に敗れ去ったという。

また、爆発の際に地蔵さんの首が吹きとばされ、全興寺には、そのとき飛んできたと伝えられる「首地蔵」がまつられてりうのやで。《ひらののおモロイはなしより》

赤留比売命神社

祭神は赤留比売命といい新羅から来た女神で、天之日鉾の妻と伝えられています。その創建は詳らかではありませんが、平安時代の延喜式神名帳に記載されていて、この地を開発した渡米氏族が氏神としてまつたものでしょう。俗に三十歩神社と呼ばれるのは、古来から祈雨の神とされ、室町時代の応永年間に干ばつがあり、その時僧の覚証が雨乞いのため、法華經三十部を誦経したところ、靈驗を得たのによるとか、当時の境内の広さが三十歩であったことによると伝えます。

またかつて住吉大社の末社であった由縁で、同社の例大祭り「荒和大抜」に、当時の七名家より桔梗の造花を捧げるのが慣例となっています。明治30年に背戸口町より移された天満宮、琴平神社とともに、大正三年杭全神社の境外末社となりました。いまは小さくなりましたが、背後の土塁と松山池は、環濠集落の名残りです。

平野の黄金水

平野郷の住民は、大正13年〔1924年〕に上水道が引かれるまで、主に井戸水を使用していたが、良好な水質のものは少なかった。その中でこの井戸の湧き水は、清涼なこと平野一と言われ、水量も豊かで郷民に荷車で配給されていた。また酒造にも用いられ、平野酒は慶長13年〔1598年〕に豊臣秀吉の催した「醍醐の花見」にも用いられました。

樋尻口門跡

中世、堺と共に自治都市として栄えた平野郷は、戦国時代には自衛のため町を土居と濠で囲んだ、環濠集落の形をもっていました。濠の間には代償13の木戸口があり、摂河泉各地へ街道が延びていて、樋尻口門は奈良街道の柏原、国分、そして八尾街道の久宝寺、八尾に通じるもので、大きな木戸を持ち遠見櫓や門番屋敷を備えていました。門の傍らに合った樋尻口地蔵堂は、郷から出るときは、一身の加護を祈り、外からの変事は、この入口で退散させようと祈願したものです。門の名は東の平野川より、伏せ樋で水を導き、ここで水流を南北に二分して環濠を潤していたことに由来します。この樋尻口地蔵堂には、難波戦記でよく語られる、**徳川家康に関する伝承**が伝わっています。

やぶ入り (徳川家康に関する伝承)

徳川家康が、大坂城を攻めた時のこと。家康は平野の陣に居たのやが、大坂方の智将、真田幸村は星を仰いで家康が平野の陣にあると出たため、決死の部下を率いて、平野に討って出たのや。家康は不意をつかれ、乱戦の中で守る兵もなくなり、ただ一人で竹淵堤まで逃げてきていた。その時幸村はもう一べん星を仰いで、たしかに家康この付近にありと、竹淵堤を進んできた。もうあかん、進退ここにきわまったと思われたのやが、かたわらを見ると藪がある。家康は命からがら藪の中へ逃げ込んだのや。(この藪を、平野の人は「塩川の藪」と呼んでいた。)

その後、家康は土地の人に助けられて百姓姿に身を变え、肥舟に乗って、平野川から逃げる事ができた。のち天下を取った家康は、この時の嬉しさを思うて、塩川さんにほうびを下さると共に、この藪の中に逃げ込んだ六日を、世間の下積みになっている人々の休養日に決めたのや。それがいま、「やぶ入り」とか「六入」とかいうて、奉公人の休日や、嫁さんの里帰りの日になってるんやで一。

立田一雄氏による《ひらののオモロイはなしより》

安藤次右衛門正次墓所

安藤正次は徳川氏の旗本で、大坂夏の陣には徳川秀忠に直属し、元和元年〔1616年〕5月7日の大坂城落城直前、秀忠の伝令として前田利常、本多康紀軍に前進するように伝えにきました。その時数騎の敵兵に出会い、単身馬を進めて豊臣方の首級をあげましたが、自らも深傷を負い、家来に助けられて報告に戻った岡山の本陣で秀忠に賞されて、宿である平野の願正寺に帰ってきて、傷の手当てに努めていましたが、再起不能を悟り19日自刃しました。時に51歳、法名は浄徳院了栄といえます。元禄14年〔1701年〕曾孫の定房が墓域を整備した際、寄進した手洗盤は、背面に正次の事跡が、漢文で詳しく刻まれた珍しいものです。

含翠堂跡

江戸時代中期の享保2年〔1717年〕5月5日に、平野七名家のひとつである、土橋七郎兵衛友直が、郷内好学の同志と共に創設した学校で、始めは庭の松に因んで老松堂といいましたが、三宅万年先生が中国の詩から選んで含翠堂と改めました。その校風は陽明学の三輪執斎、古義学の伊藤東涯など学派を選ばず、当時の一流学者が来講して、国学・儒学・算学・医学・天文学や連歌俳諧にまで及びました。学校の経営はすべて同志の寄金と、その運用で維持され、飢饉の際に度々窮民を救済して、社会救済センターとして貢献したのは、他の学塾に見られない特色です。そして、明治5年〔1872年〕学制公布により閉学するまで、150余年間存続して貴賤を問わず郷民を教化しました含翠堂は、大坂の学問所、懐徳堂に先立つこと7年、その存在が、刺激し啓発されて懐徳堂開設の契機となったことは知られています。

杭全神社

杭全神社の名になったのは明治以後で、それ以前は牛頭天王社・熊野権現社といいました。平安時代の貞観4年〔862年〕に坂上広野麿の子、当道が氏神として創建したのが第一殿で、その後鎌倉時代の建久元年〔1190年〕3月3日、一人の山伏が現れ、熊野証誠権現をまつよう勧めて立ち去り、後に残した筧の中にご神像があったので、まつられたのが第三殿です。そしてこの話を聞かされた後醍醐天皇が、元享元年〔1321年〕に造営させたのが第二殿です。

第一殿は春日造で、元禄3年〔1690年〕に建立された、奈良春日大社の本殿を、正徳元年〔1711年〕にここへ移建したものです。第二殿は流造の三間社、第三殿は春日造で、どちらも見世棚形式の建物です。第二・三殿は共に室町中期の永正10年〔1513年〕の造営で、大阪市内最古のものとして、3殿とも国の重要文化財に指定されています。境内の田村堂は、坂上田村麿、広野麿そして平野郷の先賢をまつっています。建物は明治の神仏分離まで弘法大師堂でしたので仏教建築の名残りを残しています。

◎御田植祭

現在大坂で行われているお田植神事は、住吉大社と此処の2ヶ所のみで、住吉の方は6月14日に、実際に神田へ田植えをする神事に対して、4月13日に行われる杭全の御田は、一年間の農作の手順を、所作ごとで見せて「この様に順調で豊作になりますように」と祈る予祝儀礼です。それらをすべて能狂言の形式で行われ、鎌を打ち下ろす時の言葉の「あーえい」から、この祭りにことを地元では「あーえん」と呼ばれています。昔は蒔かれる耨を口で受け、沢山入ると、その年は吉だと喜びました。また神に依代である子供の人形、次郎坊が小便をする仕種は珍しいものです。

◎平野法楽連歌

現在連歌所（宝永5年 1708年再建）の建物として現存するのは此処だけで、**連歌**会を開いているのも、九州行橋の今井祇園宮と此処のみです。中世から流行した連歌は江戸時代には俳諧の連歌となり、のち俳句に独立しました。四月の花盛りの下で行われる「花の下連歌」は優美な催しです。

◎田植祭

毎年5月23日に田村祭の神事が執り行われる場所で、坂上一族の七名家が執り行い、昔坂上氏が蝦夷征伐に向かう兵士の携帯食として、村人が作って差し上げたという「剣菱」という食物が供えられ、式後参拝者に配られます。

◎夏祭

毎年7月11日から4日間行われる夏祭は、江戸時代の町名の、野堂（東・北・南）・流・市・背戸口・西脇・泥堂・馬場の7町9丁のだんじりが、13日の宵宮に宮入する時の勢い、宮入後の車輪ひとつを軸にして、だんじりを回す平野独自の見せ場があります。そして14日の本祭には、神輿とふとん太鼓の渡御があります。

連歌

杭全神社の境内にある、宝永五年〔1708年〕に再建された連歌所は、いまや全国でも数少ない文化財です。中世から近世を経て、明治の始めまで、連歌師である、京都の里村家や大坂天満の西山家を宗匠（先生）に迎え、盛んに連歌会が催されてきました。昭和62年復活しております。

・連歌とは、その文字の通り、連衆と呼ばれる人々が一座して、五七五の長句と七七の短句を交互に詠みつらねてゆくもので、ここが個人で完成する短歌や俳句と違うところです。これを百句（これを百韻という）続けます。一例を揚げますと

A ときは今 天が下しる 五月かな 光秀
B 水上まさる 庭の松山 行祐
C 花落つる 池の流れをせきとめて 紹巴

とこのように詠みつがれてゆきます。この連歌は天正10年〔1582年〕5月24日、明智光秀が山城愛宕山威徳院で帳行したもので、信長を討つ決意を披露したものと知られています。

・この連歌の第一句（A）を発句といい、後にこれが独立して俳句となります。また最後の句を挙句といい、そこから「あげくの果て」という言葉が生まれました。

・連歌は区それぞれ句意を持ち、また前後の句とつながっています。すなわちAとBで一つの和歌のようになり、CとBでもう一つできています。

・江戸時代の俳句は「俳諧の連歌（連句）」といって、本連歌に庶民の生活圏を題材とする「俳言」を採り入れたものです。

・実際に連歌（連句）を詠むにあたっては、句がかたよらないよう、式目などいろんな約束ごとがあり、たいへん難解なのですが、それらを巧みなさばきによって興味をたかめ、素敵なお茶会にまとめ上げるのが宗匠の技量で、南北朝時代から室町時代に活躍した連歌師、宗匠（そうぜい）や心敬、宗祇や肖柏、江戸時代の芭蕉や蕪村、一茶などの俳諧師は、この宗匠といえる各地から招かれ、連衆から信頼され活躍したものです。

・平野郷に残る連歌資料や、「連歌」についてもっと詳しく知りたい方は、杭全神社が編集しました【平野法楽連歌・過去と現在】（発行 和泉書院）をお読み下さい。

平野郷を歩いて

うす曇の中、さわやかな風を感じながらの講座の始まり。大阪市内にあって、今も昔の面影を残す平野地区を探索。実は私は平野に住んで30余年、地元とはいえ古い町の歴史はわからないことばかり。最近、テレビなどでよく取上げられて、あ〜そうなんだと知ったりしている状態です。（友達なんかからは、天王寺からJR大和路線で2つ目なのに、平野ってどのあたりとか、とても田舎のように思われたりしています。）

今回この講座であらためて自分の町を勉強できるので楽しみにしていました。まずは大念仏たれ、大阪一大きな木造建築とか、幽霊の片袖のことだど村田先生の解説にどんどん引き込まれていきました。次に今野家古いお家そのまま大切に守られているのに感心。長宝寺では、バクチ好きの田村はんの話をおもしろおかしく聞きました。全興寺、ここは家もお世話になってるお寺。よく知っている所ですが、じっくり先生の話聞きながら新たな発見。一番は平野酒、平野こんにやく、楽しい昼食のひとつでした。最近、平野は人口も増え、事件、事故でワーストIになることが多いですが、自治都市として先人達の苦労話や歴史の大切な節目にこの町が関わっているなど、良いところを知り、うれしくなりました。

もうすぐ杭全神社の夏祭のだんじり宮入り（7月13日）にむけて、おけいこのかねの音が聞こえるようになります。岸和田のように激しく走りぬけることはありません。だんじりの曳き回しは是非見て下さい。

村田先生をはじめ、いろいろお世話して下さいました。楽しい時間と知識をもらいました。久しぶりによく歩きました。フーッ。北村千代江

平野郷グルメ

亀のまんじゅう TEL 06-6791-0977

創業三百年の和菓子屋。大念仏寺のお土産として、亀鉦に因み亀の饅頭が名物。一つ百円。いろいろも三百円と手頃で甘味をおさえ美味。

平野こんにやく 京政食堂 TEL 06-6791-0513

こんにやくの中に、百合根やひじき等具が沢山。田楽のたれも美味。食事に酒の肴にも合う健康食。田楽セットで一人前で280円也。

平野酒 かいたにほんてん TEL 06-6708-6007

醍醐の花見にも太閤秀吉も愛でた平野酒。江戸時代前期迄「下り酒」と珍重されて、江戸へ樽廻船で大量に運ばれていた大坂酒の中でも、平野酒は「大坂諸白」として好評を博した。平野産の一等米で大坂酒を復活。地元でしか入手できない銘酒。



平野の町づくりを考える会：昭和55年に創立。今回の講師、村田氏が創立当初から会員として活躍。

全興寺や杭全神社など地域の寺社や住民が中心となって、地域の子供達に平野の歴史・文化の伝承する一方、第4日曜日に、自宅や店舗を公開する町角博物館等を企画。7月には平野祭りを主催。「ひらののオモロイはなし」を小冊子にまとめ200円で販売するなどの住民活動を展開している。